

てんとうむし

特集

『不登校と一緒に考える』

～再び動き始めた子どもたちを支えるために～



のびのび～

題名「てんとうむし」の由来

ヨーロッパの言い伝えにてんとう虫の話があります。

領主は殺人の罪で死刑になる若い農夫に、最後の願いとして神に祈ることを許しました。若者が石の上にひざまずこうしたとき、1匹のてんとう虫が石の上におりました。若者はそのてんとう虫をつまみ上げると、そっと逃がしてから最後の祈りを捧げました。飛び立ったてんとう虫はこの若者を捕らえた殊勲者の左手に止まりました。殊勲者はてんとう虫には全く哀れみもかけずにつぶしてしまいました。

この様子を見ていた領主はこの相反する二人の行動にハッと胸をつかれるものを感じ、裁判をやり直しました。その結果、若者はぬれぎぬで真犯人は殊勲者であったことがわかりました。てんとう虫は真実を伝える虫として、古来ヨーロッパで親しまれてきました。この話にあやかり題名を「てんとうむし」としました。

目次

- 卷頭言「高校生から貰ったエネルギー」 2ページ
- 「心に届くことば」 3ページ
- 特集「不登校と一緒に考える」 4~7ページ
～再び動き始めた子どもたちを支えるために～
- 「ほっとひとこま」「読者の声」 8ページ



[モバイル青少相]

高校生から貰ったエネルギー

生涯学習・生涯スポーツなどの概念が世の中に現れて久しくなりますが、昨今では国内に普及して多くの人達が参加し、日常生活を豊かにしています。

私には幾つかの趣味があり、いずれも生涯やり続けようと思っています。しかし、趣味三昧の毎日ではありませんので、頻繁ではないけれども継続性のある趣味として弓道へ入門しました。

今から27年前になりますが、市立総合体育館で行われた初心者弓道教室を受講しました。それ以来続けて現在に至っており、自分の生涯スポーツとして位置づけています。入門直後から週何回かの練習を重ねており、上述の程度に応じて行った大会への参加や段審査へのチャレンジなどは大変楽しく充実したものでした。更に弓道協会の役員としても役割を受け持ったため、多くの人たちとの関わりが増えて人生哲学の勉強もできることを感謝しています。

さて、平成16年秋、市立総合体育館で開催された初心者弓道教室の最終日に終了後の継続指導の話をしたところ、女子高校生から「学校に弓道部をつくりたいので、指導してください」とのお願いがありました。私はためらうことなく「はい、一緒にやってみましょう」と答えました。これまでの「弓を教える」ことだけではなく、「弓道部を立ち上げて、それを育てる」という使命があることを認識すると共にやりがいのあることにも気付きました。

折しも弓道協会では、弓道普及に加えて『学校弓道』への支援も促しており、役員会の了承もいただきました。これを進めるためには、学校の意向をうかがって、こちらの体制も整えた上で実施を考えました。

この高校生は市内にあるS女子大学高等部の生徒です。1年生5人で弓道教室が終わったら、部活にしようと話し合って決めたことで、その勇気のあることにはとても感心をしています。学校では、「やっていただければ、ぜひお願いしたい」とお答えをいただいたので準備に

入りました。

まず、指導者をどうするかでした。しっかりした弓技を持った経験豊富な高段者で、しかも学校の近くに住んでおり、指導の曜日・時間に交代で都合がつけられるような人。このような方を充てるお願いをしたところ、協会の5人の女性が快く引き受け、私を含めて担当することになりました。

学校には、弓道場は勿論弓道具などは全く無く、中学校のアーチェリー場に骨を立て掛けたにわか弓道場での練習であり、弓・矢・ゆがけなどの道具も協会からお借りしてスタートしました。参加した生徒は7人程で始まり、2年間は同好会として活動していましたが、3年目にその成果が評価されて弓道部として認められました。全日本弓道連盟に加盟し、高体連から県大会へ出場し、相模原市民弓道選手権大会では入賞するまでになってきました。また、弓道修練の成果確認として審査の受審を促しており、卒業時には式段の取得を目指して励んでいます。

部員数は年度毎に異なりますが、次第に増えて2桁を保ち、今では30人程になっています。新入部員の勧誘では、オリジナルのデモンストレーションを部員たちで考案し、入部の結果につなげています。

以上、高校生の部活立ち上げの様子をご紹介しましたが、初めに『弓道部をつくりたい』という発案をし、アクションしたことに高校生らしい活力を感じます。この部活には弓道場が無いので、一日も早く自前の道場で練習できるように願っています。

これに関わるものとして、部員たちの様子を垣間見ながら新鮮なエネルギーを貰っています。そしてこれからも関わり続けられるよう考えています。

青少年相談センター運営協議会委員
相模原市民生・児童委員協議会会長
相川真慶



心に届くことば

青少年相談センターには、電話相談を専門に受けるヤングテレホン相談員がいます。長年、相談者の話を聴き続けてきた一人の相談員が今の思いを綴りました。

電話相談

電話相談とは、相手の顔も見えず様子も見ることができない、ことばだけの世界です。しかし、そのことばの奥にひそむ、その人の今を感じ支えていくことの大切さを痛感し、聴き続けてきました。近年、ますます感情を表し、それを人に伝える方法が分からず人が増え、感情を伝えることばの数も減っています。また、負の感情を自分の中に溜めておけず、整理も出来ない為に、話す時は、ストレートに単発的なきついことばで自分の感情をぶつけてきます。ことばの力が衰え、ますます電話でのやりとりが難しくなっています。しかし、表面的な話を聞くだけでなく、その奥にある本当のその人にいかに近づき、語って貰えるかが電話相談の命です。

心に届くことば

話していく中で、互いにことばが届いたと感じる瞬間があります。ことばが、心に落ちた、まさにその時です。ことばの力を、互いに向きあっている幸せを感じざるを得ません。「語る」「ことばにして思いを伝える」という行為は、人間の本能、人が人である一番奥深いところに関わっているのではないか、という気がしています。人は語りたいのだ、人は物語りたいのだ、と実感しています。

私は、人は喜びを語るよりも、悲しみ・苦しみを語ることこそ、次へのエネルギーが生まれてくる、次の一步に繋がると確信しています。人がことばにして思いを語る。そこには必ずことばを受け取る相手の存在が必要です。きちんと聴いてくれる相手がいて成り立つのです。

「ことば」。もう、そこには、すでに共にあるという意味が含まれていると思います。かっこいい、難しいことばを返す必要はないのです。どんなことばでも、あなたと共にいる、というメッセージが伝われば、それが本当のことばであると考えています。

心に届くことばとは

美辞麗句ではなく、まさに向き合っている、共にある関係の中から相手に届けられた、あなた自身なのだと思います。

特集

『不登校と一緒に考える』 ～再び動き始めた子どもたちを支えるために～

「あなたは、なぜ学校に行くのですか？」

この問いに、子どもたちはどのように答えるでしょうか。

現在、相模原市には109校の公立小・中学校があります。そこに在籍する多くの子どもたちは、毎日元気に学校に通い、学習に、遊びに、部活動にと、たくさんのエネルギーを注いでいます。学校は楽しいことがたくさんありますが、時にイヤなことがあったり、休みたいと思ったりすることもあります。それでも子どもたちの多くは休まず登校しています。

一方で、学校を長期にわたり欠席している子どもたちもいます。その中には、学校に行きたいのに行けない子、大きな集団の中にいると気持ちがとても不安定になってしまい、人と会うことができなくなり、気持ちを閉ざしてしまっている子などがいます。

しかし、それらの子どもたちは、実は再び動き始めるチャンスをうかがっているのです。学校や家庭、相談機関は、そのような子どもたちに対し、どのように関わればよいのでしょうか。青少年相談センターの取り組み、青少年教育カウンセラーの意見を参考に、「再び動き始めた子どもたちを支えるために」できることを考えてみました。

なぜ学校に行けなくなるのでしょうか

子どもたちが学校を休み始めるきっかけは様々です。平成21年度の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、相模原市の公立小・中学校の不登校者数（年間30日以上の欠席）は、小学校181人（在籍者数0.47%）、中学校864人（4.72%）、全体で1,045人（1.84%）となっています。その主な要因として、先生方は次のようにとらえています。

| 小学校 | 中学校 |
|----------------------|----------------------|
| 親子関係をめぐる問題（18%） | 学業の不振（10%） |
| 家庭の生活環境の急激な変化（10%） | いじめを除く友人関係をめぐる問題（9%） |
| いじめを除く友人関係をめぐる問題（9%） | 親子関係をめぐる問題（9%） |
| 学業の不振（5%） | 学校のきまり等をめぐる問題（9%） |
| その他本人に関わる問題（28%） | その他本人に関わる問題（29%） |



また、子どもたちの心からは、次のようなつぶやきも聞こえてきます。

- ・クラスがえがあって、なかよしの友だちと違うクラスになっちゃったなあ…。
- ・なんだか、友だちとかよく遊べないなあ。すぐケンカしちゃうし。おこられてばかり。学校行きたくないなあ…。
- ・お兄ちゃんだって学校行ってないし。なんでぼくだけ行くの？めんどくさいなあ。

- ・わたし、なんか変なこと言ったかしら。みんなに笑われちゃった。
- ・中学って勉強難しいなあ。今度のテストが心配。
- ・夜、友だちの家に集まって遊ぶほうが楽しいし。朝起きられないから、休んじゃおう。



青少年教育カウンセラーから見た、再登校に向けたサイン

休み始めるきっかけは様々であっても、いったん不登校になると、その回復には同じような過程をたどるといわれています。欠席が多くなり、学校から足が遠のいている時は、学校に行けないことに対しての重荷が大変大きくなっています。このような状態の時は、子どもたちへ働きかけても学校へなかなか気持ちが向かないものです。「見守る」期間がしばらく続きます。

しかし、次のようなサインが出てきたら、子どもたちの気持ちが学校へ向き出しています。

【小学生】



【中学生】



<こんなサインも見逃さないで!>

家庭で「おはよう」などの挨拶をするようになる。

家庭での手伝いが増えたり、自分の部屋を整理したりするようになる。

床屋や美容院に行って髪を整えるようになる。

学用品や制服を気にするようになる。

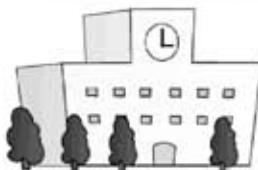
こんなサインが見られたら、チャンスです。子どもたちに対して家庭や学校から少しづつ働きかけをしていきましょう。



かかわりの具体例 ~青少年教育カウンセラーからの意見~

さて、「動き始めた」サインが見られたら、具体的なかかわりを開始します。学校や家庭、子どもの状況に合わせて、無理なくできることから始めます。「見守る」だけの時期は過ぎつつあります。

学校のかかわり



- ◆働きかけましょう
- ◆安心して過ごせる居場所を作りましょう
- ◆学習支援をしましょう
- ◆登校はスマールステップで進みましょう

登校するきざしが現れた時には、時間割、持ち物、校舎（教室）に入るときのタイミング等を、事前に十分先生と確認し合うことが大切です。そして、登校できたときはつい大きく喜んでしまいがちですが、あえて“自然に”接するようにします。

また、長く学校を休んでいると、高学年や中学生は、学習の遅れがとても不安になります。学習進度を事前に伝え、状況に応じ、補助教材を準備したり、個別的な学習場面を設けたりします。中学生は進路に関する情報や資料を、適宜提供します。そして何より大切なことは、登校は一気に欲張らず少しづつ進めることです。（最初は校門まで。次に昇降口、相談室・・・。そして教室。）

家庭のかかわり



できないことには触れず、できたこと、頑張ったことを一緒に喜びます。また登校の意思を示しても「断ることのできる」よびかけをすることも大切です。

再登校したときは心身とも疲れているので、その気持ちを理解し、一緒に気分転換をしましょう。好きなことをしてすごせる自由時間を保障します。

また、たとえ子どもがまだ先生に会えなくても、保護者が学校にプリントを取りに行くなど、学校とつながり続けていけるといいででしょう。

- ◆寄り添いましょう

- ◆気分転換の場を設けましょう

- ◆学校とつながっていましょう

その他のかかわり



- ◆青少年相談センター
- ◆青少年教育カウンセラー
- ◆青少年相談員（主任児童相談員、民生相談員、保護司他）
- ◆各区のこども家庭相談課
- ◆児童相談所
- ◆県警少年相談・保護センター

家庭となかなか連絡がとれなかったり、養育上課題があつたりする場合には、様々な機関が役割分担をして支援することができます。



ぼくとわたしの再チャレンジ ~再び動き始めた子どもたち~



様々な人たちからの適切なかかわりを受けることで、不登校の子どもたちはエネルギーをため、再び自分の力で動き始めます。青少年相談センターでは、今までにこうして再チャレンジをしてきた子どもたちに、たくさん出会ってきました。実際の事例を少しご紹介します。

担任・支援教育コーディネーター・青少年教育カウンセラーによる連携ケース

- 事例:年間30日以上欠席していた小学5年生。
小学4年生の頃から、物を壊す、暴力、離室など行動上の問題が顕著であった。5年生に進級するが問題行動は改善せず登校渋りが始まり、1学期中旬には、ほとんど登校しなくなった。
- 復帰まで:小学5年生の2学期から、まず学級担任が学級の中に本兒の居場所を確保した。その後カウンセラーの面接が始まると同時に、コーディネーターが中心となり、関係者間の情報共有と具体的な対応の方向性を検討した。その結果、本人の状態を的確に把握した上で課題設定ができ、学校生活においての達成感が高まるとともに、適応状態も改善され、登校状態も安定した。

学校・児童相談所・相談指導教室による連携ケース

- 事例:教育委員会、児童相談所等の働きかけに応じず、小学校入学から一日も出席がないまま中学校に入学。
- 復帰まで:児童相談所担当者、指導主事が関わり、中学2年生の3学期末に相談指導教室につながる。相談指導教室では、家庭(父と子)と学校(校長、生担、学年主任、担任)の間で双方をつなげていく役割を担うことになった。中学3年生の2学期から、相談指導教室に在籍しながらも、学校に登校し、最後には後期選抜で公立高校全日制に合格し、卒業式にも参加できた。

相談指導教室に通室している児童・生徒の声

わたしは、体型や見た目でいじめられて学校に行けなくなりました。中学校1年から相談指導教室に通い始めました。特に3年生の6月から毎日通うようになりました。勉強も頑張りました。担任の先生が心配してくれて、いろいろ教えてくれたので高校に行きたいと思いました。高校に入ることができるように相談指導教室の先生と毎日勉強しました。公立高校全日制普通科を目指しましたが、前期選抜では合格することができませんでした。後期選抜では、全日制と定時制の両方を受けてみることにしました。全日制の試験が終わると定時制の勉強を始めました。全日制は受からないと思っていたのに、なぜか全日制に受かってしまいました。とてもうれしかったです。せっかくつらんだ全日制の高校なので、今は通学など苦しいこともありますが、頑張って通って卒業したいです。

(中学校相談指導教室通室生の、卒業時の声)

「少しづつ学校に行けるようになってきているので、もっと学校に行き、行事などに参加していきたい」

「3年生なので、受験もあるので、毎日、相談指導教室に通いながら、学習にしっかり取り組みたい」
(2学期初日に述べた個人の目標:中学生)

「今日は、おべんきょうをしました。トランプもしました。ダウトをしてかちました。楽しかったです。水そうのそろじもしました。」

「今日は午後にスポーツをしました。一番最後にやった野球が楽しかったです。かっこばせました!!」
(日常の活動を終えての感想:小学生)

青少年相談センターでは、「不登校対策プロジェクト21」の取り組みとして、再登校への効果的な支援のあり方を示した冊子『ぼくとわたしの再チャレンジ～再び動き始めた子どもたちを支えるために～』を、平成23年2月に発行します。ここで紹介した内容が、より詳しく掲載されておりますので、ぜひご活用ください。



「ほっとひとこま」

その51



学校の相談室や相談指導教室では、
こんなほっとする時間が流れています

青少年教育カウンセラーさんがそっと教えてくれました

中学生になると、小学生の時よりも身体も少しずつ大きくなり、その成長とともに心の悩みも変化してきます。勉強、部活、友達、家族、恋愛…。今まで悩まなかったことでも、中学生になると急に大変になることもあるかもしれません。

相談室には様々な生徒が来室します。自分の悩みを言葉にできない子、勢よく話してスッキリして帰っていく子…。みんな中学生の繊細な心で自分の悩みに立ち向かっているのだと思います。

そんな子どもたちが相談室で過ごす中で、だんだんとリラックスし自分を表現できるようになると、少しあどけなさの残るキラキラした笑顔を見せることがあります。その笑顔は何より素敵で、私がほっとできる瞬間です。 (Hカウンセラー)

いつも元気な顔で中学校の相談室に遊びに来てくれていたお子さんいます。その日、ふと、数ヶ月も前にあった悲しい出来事を話してくれました。これまで、たくさんの人に平気な顔をして話してきたし、明るく学校生活を過ごしてきたはず。でも、その日、静かな相談室で大粒の涙がボロリ。こんなにも長い間、頑張っていたんだね。よく話にきてくれたね。

学校では、いつも元気に部活や勉強をしている子どもたちを目にします。どんな子も、本当に一生懸命。校庭で元気よくかけ回る子どもたちを相談室の窓から眺めながら、きっとそんな子どもたちだからこそ、そっと涙を流せる場所、ふといつもの頑張りをお休みできる時間も大切なかなと思いを巡らせます。そして、勇気をもって話に来てくれた子どもたちに、ちょっと休憩をしに相談室に来てくれた子どもたちに、いつもありがとうございますの気持ちを持ち続けていたいと思っています。 (Mカウンセラー)

小学校の相談室での出来事です。ある日、昼休みに子どもたちが相談室でトランプをしたり、お話をしたり、元気に過ごしていました。そこに、一人の女の子が来て、「相談したいんですけど」と。相談室で過ごしていた子どもたちに「相談をしたい人がいるから、みんな、また相談がない時に遊びに来てもらっていいかな」と言うと、「えー!」という不満の声が聞こえてきました。すると、ある高学年の女の子がすっと立ち上がり、「また来るね」と言い退室していました。それを見ると、「えー!」と言っていた他の子どもたちも、ゲームを片付けて退室していました。このような場面を見て、この相談室で、高学年の子どもから低学年の子どもへと大切なことが伝えられていること、また、相談したい人を大切にできる子どもたちのこころを感じることができ、嬉しく思いました。 (Aカウンセラー)

子ども達が相談室に集まる休み時間は、それほど長い時間とは言えません。ただ、その数十分の間でも、子ども達個々の感情表現の方法に出会うことができます。

ある小学校では、ホワイトボードに雲と雷の絵を必ず描いていく男の子がいます。ある日、私から「今日もA君のこのへんで(胸のあたり)雷が鳴ってるのかな」と問いかけると、A君から「雨も降ってるよ」という言葉が返ってきました。その日から、私は毎週、数分でも、「心のお天気情報」を伝え合うようになりました。回数を重ねるごとに、「今日は○○だから、真っ黒雲」「今日雨。体育があるから」と、具体的な理由も加わりました。

私にとって、子ども達と過ごす休み時間は、「表現の可能性を子ども達から教えてもらう時間」でもあります。その子の用いる表現を使わせてもらうことで、身体の深いところに通じてくる感情に触れることができます。このときの身体で感じる温かい感覚を、私は日々、大事にしたいと思っています。 (Oカウンセラー)

読者の声

小学生のための相談指導教室に関わって2年になります。数ある活動の中に植物の世話をあります。みどりの協会からいただいた花の苗に肥料を与え、水やりや草取りをして育てています。今年の夏は例年にない猛暑でした。そこで「緑のカーテン」を作ることになりました。児童と一緒にネットを張り、朝顔とゴーヤを育てました。朝顔はたくさんの花が咲き、とてもきれいでした。ゴーヤは残念ながら1個しか実がつきませんでした。

南相談室の近くには区役所があり、行き交う人がとても多く、声をかけてくる人もしばしばいます。「きれいだね」「暑いのに大変だね」等々。いつしか市民との交流の場になっていました。これから予定は、採取した朝顔の種を、メッセージとともに小袋に入れ、相談室に来室した市民の方々に差し上げるということです。来年の夏は、相談指導教室で育った朝顔の種が、各家庭できれいな花を咲かせ、そして市民との輪がさらに広がることを願って…。

(青少年相談センター 嘴託職員 菅原正美)

ヤングテレホン相談



一人で悩まず まず相談!

小・中・高校生や19歳以下の青少年の抱える悩み、心配事などを本人や保護者から直接電話でお受けし、専門の相談員が一緒に考えます。(匿名での相談もお受けします。)

専用電話 042-755-2552 Eメール相談 (24h受付) yantele@city.sagamihara.kanagawa.jp

受付時間 月曜日~金曜日 午前8:30~午後9:00 (土・日・祝日は留守番電話)